

## 江戸時代三田盆地の農村と農業

2007年7月14日 講師：三田市史編さん専門委員 中山 清

### 1 はじめに

- ① どんな作物をどんなふうにつくっていたか
- ② どんな人々が作っていたかー人のありさまー を残された史料から考える

### 2 農業生産のありさま

- (1) 福尾猛市郎氏旧蔵「大福当座覚帳」について（582頁262～268）※大福：豊作  
麻田藩領田中村庄屋福井藤兵衛 文政4（1821）年～嘉永2（1881）年  
一般的な農家よりはやや経営規模が大きく、庄屋を勤めたと思われる福井家の大福帳。  
金銀（費用）の出入りに関する記載が大半であるが、農作に関する興味深い記録がある
- (2) 作物：農産物、林産物、手工製品など  
○綿：綿打ちに出したものを少なくとも野良着に作り替えていたのではないか。  
○まつたけ：池田などに売りに出していた。
- (3) 栽培・製作  
○田に植え付けた品種と場所に関する記録（別紙）→試作による絶え間ない改良の工夫  
○なたね、ゆりね、やまのいも等の栽培作物。  
○干鰯・油かすなどの金肥の購入とその合理的な利用に関する記録→「経営」の意識
- (4) 利用・販売  
様々な日雇職人の存在、商人への払いに関する記載

### 3 農村住民のありさま

貴志村と山田村の持高分布

高/村	貴志村	山田村
50石～	※50石	1※
30～50	1※	※33石
20～30	1 2	3
15～20	2 4	7
10～15	2 4	6
5～10	8	4
1～5	7	5
～1石	0	0
0	3	?
合計	79人	26人

- (1) 農民のありさまー土地所持の状況
  - ① 天保3（1832）年貴志村「御物成名寄之帳」（市史未掲載）  
三田藩、村高1147石4斗・・・市域では石高の大きい村
  - ② 天保4（1833）年山田村「反別名寄帳」（460頁194）  
三田藩領、村高369石3斗8升・・・石高の小さい村  
持高10石の農家は自立的と言える。表から持高10～20石の農家が平均的な規模といえる。持高30石以上や0の農家の存在は、農地の移動や地主ー小作関係の存在をうかがわせる。三田地域には巨大地主は存在せず、小規模な自作が中心。

- (2) 諸職人の存在・・・農村内で暮らすのは農民だけではなかった。  
天保13（1842）年「諸職人小商売御請書」（631頁311）にみる  
「天保の改革」の「人返し」（帰村）政策にかかわり村内の職人・非農家を申告させた史料。  
桶屋、木挽き、屋根葺き、畳屋、指物屋、鍛冶屋、建具屋、箱屋、酒屋がみえる。

### (3) 住民のありさま

- 嘉永3（1882）年「身体限り附立帳」（470頁202）にみる  
農家が所持した家財道具の内容が知られる史料